

要旨：

新生児聴覚スクリーニング検査で両側難聴と診断された児に対する適切な聴覚的ケアの方法を新生児集中治療室入院児(Neonatal intensive care unit infants, 以降NICU児)とそれ以外の児(well-baby nursery infants, 以降WBN児)に分けて調査し、報告する。

2003年から2012年の間に北里大学病院で新生児聴覚スクリーニング検査後の精密検査を行ったNICU児53例とWBN児66例を対象とした。対象のスクリーニング検査の結果、精密聴力検査を受けた月齢、難聴の程度、現在の発達状況、補聴器装用開始月齢、補聴器の装用状況、リハビリテーション施設について調査した。

精密聴力検査を受けた月齢の中央値はNICU児で4ヵ月、WBN児で1ヵ月とWBN児が有意に早かった。NICU児36例(68%)とWBN児49例(74%)が両側難聴と診断された。補聴器装用開始月齢の中央値はNICU児で15ヵ月、WBN児で10ヵ月とWBN児で有意に早かったが、その後の補聴器の装用状況は両者で変わらなかった。両側難聴児のうち、NICU児25例(86.2%)とWBN児14例(43%)が知的障害と診断された。NICU児4例(13%)とWBN児17例(38%)が聾学校に入学した。NICU児19例(61%)とWBN児7例(16%)が知的障害に対する特別支援を受け、NICU児8例(26%)とWBN児21例(47%)が一般の幼稚園・保育園や小学校に入学した。

両側難聴と知的障害を併せ持つ児の多くは、難聴の程度に関わらず特別支援が必要だった。耳鼻咽喉科医と言語聴覚士はそれぞれの児に適したリハビリテーション施設を選択するために聴力に加えて発達の状態を評価しなければならない。